

5 S児の姿を通して（4～5歳児）

濱田 貴宏 徳田 いずみ

S児は2年保育として昨年4月に入園した当初、着替えを嫌がったり、牛乳タイムの時に自分の座席に座っていられず教師の側にいたりした幼児である。秋の遠足では年長児と手をつなぐのを嫌がってずっと泣いて歩いたり、仲良しランチの際には、グループのシートの中に入るのを頑なに拒んで泣き通したりした。ただ、教師と一緒に手をつなぐと安心するのか、もう片方の手を年長児とつなぎながら、園外保育に出かけられたこともあった。2月、クラス活動として「しっぽとり（鬼ごっこ）」をした時は、自分が鬼になって追いかけることはするものの、追いかけられる場面では、一切動こうとしなかった。

そこで、自分をもっと解放するような経験を積んでいくことがS児にとって重要なのではないかと思い、援助してきた。

事例1 「逃げるのいやなの」

3月3日（木）4歳 すみれ組

3月にしては比較的暖かい日だった。弁当後、戸外へ出てさくら組、すみれ組一緒に鬼ごっこをすることになった。氷り鬼は、今まで何回もやっている。ルールも子どもたちは分かって楽しめるゲームである。

青帽子をかぶっているすみれ組の幼児らが逃げる白帽子さくら組の幼児らを追いかけている。S児は青帽子をかぶり、友達を追いかけていた。教師が笛を吹いた。

H教師 「では、今度は交代します。すみれ組さんが、白帽子だよ」

幼児らは帽子をかぶり直し、さくら組が、ステージの上でカウントを取り始めた。

さくら組 「1、2、3、4、5、6、・・・」

S児が逃げるのかと思いきや、テラスに向かって走っていった。側にいた教師とA児が気がついて、S児の後を追った。

A児 「S児ちゃん、どうしたの？」

教師 「次は逃げる番だよ。A児ちゃんと一緒に逃げたら？」

S児 「・・・」



S児はかぶりを振っている。教師は、S児が逃げる役は嫌なことは推測できたが、ここで、S児が嫌なことから逃げてばかりではいけないと思い、半ば強引に誘った。

教師 「S児ちゃん、先生と一緒に走ろう！」

S児 「え！」

教師はS児の手をとって、けやきステージの周りを、鬼に捕まらないように走った。S児も教師に手を引かれながら、一生懸命走った。

H教師 「ピーーー！」

教師 「やった！S児ちゃん、捕まらなかったね」

S児は、嬉しそうな表情をして、息を弾ませていた。

教師 「S児ちゃん、走るの速いね」

S児は、教師にそう言われて、ちょっと満足気な様子だった。

○S児の学び

- ・先生と一緒に走れば、自分も走ることができ、逃げることもできた。
- ・テラスに行けば、先生や友達が心配して来てくれる。
- ・走ったら、先生に認められた。嬉しい。

○教師の学び

- ・強引でもS児と一緒に走ったら、S児も走れる。
- ・「走る」という体をつかった動きが、S児の気持ちを解放し、徐々に苦手なこと怖いことにも慣れていくだろう。
- ・「走る」という気持ちのよさ、そういった単純な感覚が基本になってゲームが成り立っていく。
- ・追いかけたり、逃げたりする幼児の姿を大らかに見てとり、遊びとして認めていくことが大事である。幼児はそこで加減や楽しさを体で学んでいく。
- ・「逃げる」「追いかける」という活動の中に基本的な信頼関係が必要になってくる。

○今後に向けて

S児のような追いかけられる怖さの経験の不足している幼児には、敢えて「おにごっこ」のような遊びを今後取り入れていく必要がある。そして、「走る」ことの爽快感を体で感じ取ったり、友達との信頼関係も日頃の生活と並行して築いたりしていく。

こいのぼりの集いに向けて、鍵盤ハーモニカを選んだ幼児らがつき組保育室で練習しているとき、その他の楽器をする多くの幼児はプレイルームで遊んでいた。教師がプレイルームの片隅から幼児らの様子を見ていたときに、S児が教師のところに来て真剣な顔でいった。

S児 「もうお片づけしよう」

教師 「どうしたの？」

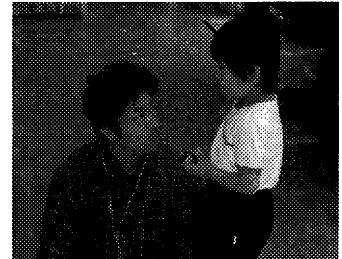
S児 「もうお片づけしたいの」

教師 「まだ遊べるよ。さっき一輪車やってたじゃない」

S児 「でも、うまくできないからもうやめた」

教師 「そうか…もう少しで鍵盤ハーモニカのお友達も(練習が)終わりそうなんだけど」

S児 「・・・」



その後、S児は何度か教師のところに来ては「お片づけしよう」と言いにきたり、鍵盤ハーモニカの練習をしているB児のところに行って、弾いている様子を見ていたりしていた。やがて、片づけになり、S児は率先して片づけはじめた。

○S児の学び

- ・一輪車は、もっと練習しないとうまくできないなあ。難しいなあ。
- ・はやく片づけにならないかなあ、まだ、遊ばなくちゃいけないのかなあ。
- ・音楽隊(タンバリン)の練習したいなあ。

○教師の学び

- ・一輪車にチャレンジする気持ちがあるんだ。
- ・できないと、すぐにあきらめてしまうのかもしれない。
- ・制限された空間やものの中では、もう少し遊べるかと思ったがそうではないのだ。
- ・音楽隊の練習の方が興味あるのかな。

○今後に向けて

S児が一輪車をしたということは、体で学べるチャンスができたということだったが、ここを逃してしまっている。教師はS児からの言葉に対して「どこが上手くできないの？見てあげよう」といったような言葉をかけていたら、展開は随分と変わっていたかもしれない。今後は、S児の挑戦する姿に出会ったときには、受け止めて励ましていくようにしたい。

弁当の時間のことである。それまでにここに顔で弁当を食べていたS児の顔がだんだんと曇ってきた。

S児 「・・・先生、もう食べれない・・・」

いったとたんにもう涙が出てきた。

S児 「うえ～ん、もう、食べれない・・・」

教師 「どれが食べれないの？」

S児 「・・・」（指できんぴらごぼうを指す）

教師 「これは、お腹がいっぱいで食べれないの？嫌いで食べれないの？」

S児 「・・・」

教師 「嫌いな？」

S児は泣きながらそっと頷いた。

教師 「う～ん、じゃあ、頑張って一口だけ食べてみな」

そういつて、そばにいたC児の弁当を見ていると、また一段と大きな泣き声になった。

S児 「うえ～ん、食べようと思ったら落としちゃった・・・」

後ろにいたD児がすぐに拾ってくれた。

D児 「これ（ホイルカップ）に入ってたから、大丈夫だよ！汚くない」

S児はそれを受け取り、弁当箱に戻したが、そのあと食べようとしなかった。教師「どうしても無理なら今日はいいいよ。明日こそ全部食べられるといいね」そういうと、それまでの強張った顔がほっとした顔になり、弁当箱を片づけ始めた。

○S児の学び

- ・弁当は嫌いなものでも食べなくちゃいけないんだ。
- ・D児はやさしいところもあるんだなあ。
- ・どうしても食べれなかったら残してもいいんだ。

○教師の学び

- ・この場合泣いてしまったのは、食べなくちゃいけないという約束が守れそうになかったからなのか。
- ・前日に言ったこと（明日は全部食べられるといいね）がプレッシャーになっていたのかもしれない。
- ・弁当の量を少なくしてきたが、食べるものによって残してしまうんだ。

○今後に向けて

保護者にも協力を求めながら、S児が食べたいと思うような働きかけをしていく。空腹感も体で感じられるようにもっと体を動かす活動をクラス全体で取り入れていったり、教師の方から誘ったりしていく。また、状況によっては遊びそのものを精選していくことも視野に入れる。

事例4 「やればできるじゃない！」

4月27日（水）

S児 「うえ〜ん」

弁当時にS児の泣き声が響いた。

教師 「どうしたの？」

S児 「もうお弁当食べられない・・・」

教師 「この前はN先生と一緒に全部食べられたじゃない。前より中身も少なくなってるし、大丈夫、食べられるよ！」

S児を励ますつもりでいったのだが、本人はさらに大きな声を出して泣き始めた。

S児 「うえ〜ん、えっえっ・・・」

あまりに声が大きく、他の幼児の迷惑になるなあ、どうしようかと迷っていた所へ、ちょうどI教師が通りかかった。

I教師 「あら、S児ちゃん、どうしたの？」

S児 「えっえっえっ・・・」（泣き続けている）

教師 「S児ちゃんが弁当を食べられないといっているんです」

I教師 「そう。じゃあS児ちゃん、あっちで一緒に食べようか」

I教師とS児は保育室を離れ、プレールームの片隅で一緒に弁当を食べ始めた。しばらくして、教師がS児の様子を見にいくと、S児はI教師に励まされながら泣かずに弁当を食べていた。

I 教師 「あなたは、一口食べるのが小さいのよ。もっと大きい口を開けてごらん。そうそう。パクッと食べるの、パクッと！」

(S 児、これまでにない大きな口を開けてパクッと食べる)

I 教師 「そうそう、それくらい大きな口を開けなくっちゃ！やればできるじゃない」

I 教師に促され、鼓舞されながら S 児はこれまでにない短時間で弁当を完食することができた。

I 教師 「ほーら、全部食べられた。よかったね。全部食べたら気持ちいいでしょ？」

S 児 「・・・うん」

S 児は、照れたような、嬉しいような笑顔を見せた。

○S 児の学び

- ・(ごちそうさままでに) お弁当全部食べられそうにないなあ。
- ・先生と一緒に食べられて嬉しいなあ。
- ・大きな口を開けて食べると一度にこれだけ食べられるんだ。
- ・大きな口を開けて食べると早く食べられるんだ。
- ・全部食べられてよかった。

○教師の学び

- ・保護者にも協力してもらい、弁当の量を少なくしてもらったのだが、量の問題ではなさそうだ。
- ・先生と一緒に食べることで落ち着くのかかもしれない。
- ・場を変えることで気分転換になる。
- ・具体的な食べ方を伝え、させてみることで S 児なりに体感できた。

事例 5 「全部食べたよ！」

5 月 10 日 (火)

教師は「いただきます」をしてから幼児らの弁当を順にみていた。S 児の食べているところにきたとき、S 児が笑顔で教師に話しかけた。

S 児 「今日はこんなお弁当なの！」

見ると、かわいいおにぎりが二つと、色彩豊かなおかずが入っている。



教師 「おいしそうだねえ」

S児 「お母さんがつくってくれたの！」

そういうと、おにぎりをパクッと食べ始めた。先日I教師に教えてもらった食べ方を家での食事でも実践していると聞いていたが、今日の食べっぷりも以前に比べずいぶん元気になったと感じた。教師も弁当を食べ始めてしばらくすると、S児がにこにこ顔で教師のところに来た。

S児 「もう全部食べたよ！あかグループで一番だったよ！」

そういいながら、空っぽになった弁当箱を教師に見せた。

教師 「びっくり一んに（全部）食べたね！おいしかった？」

S児 「うん。全部食べたらおいしかった！」

教師 「そう、それはよかった」

その後、S児は弁当箱を丁寧に包み、食後の歯磨きをはじめた。

○S児の学び

- ・おいしそうなお弁当だなあ。
- ・全部食べられそうだな。
- ・大きな口を開けて食べるといいんだ。
- ・グループで一番早く食べられた。嬉しいなあ。
- ・全部食べたら気持ちいいなあ。

○教師の学び

- ・弁当についてはS児なりに全部食べられるという自信がついたんだな。
- ・自信や見通しのあることに対しては意欲的な姿が見られる。
- ・できたことを認めることはやはり大切だ。

★事例4、5を通して見えてきたこと（今後に向けて）

- 1、具体的な細かいステップでどうすればよいか伝えること
- 2、実際にやらせてみること
- 3、したときに、大いに認めること

これらが自信と見通しをつけることにつながるが見えてきた。

宇宙のはじき絵をかくときのことである。グループでカーペットの準備などをして、グループ毎に集まって絵をかくように伝えたところ、S児が泣き始めた。

S児 「え～ん、え～ん、えっえっ」

教師 「どうしたの？」

S児 「みんなと一緒にかきたくないの・・・」



泣きながらS児は訴えた。

教師 「どうして？」

S児 「・・・」

教師 「わけがないのに、みんなとかきたくないって、それはわがままだよ」

S児 「うえ～ん」

泣き声がさらに大きくなった。あまりの泣き声にクラスの多くの幼児がS児を見ている。

教師 「今S児ちゃん泣いているけど、あかグループのみんなと一緒にかくの嫌って泣いてるんだ。少しうるさいかもしれないけどみんな我慢できる？」

・幼児ら 「うん！」

S児にはわがままだと伝えたので、その言葉を受けてどう行動するか見守ることにした。周りの状況を見ながら、自分から同じグループの子らと一緒に絵をかき始めて欲しいと願っていたが、S児は教師の顔を見ては目が合うと泣き声のトーンが大きくなり、そうでないときには少し小さな泣き声を繰り返した。そして、その間まったく絵を描こうとはしなかった。ほとんどの幼児が絵をかき上げ、そろそろ弁当にしようという頃、今度は

S児 「一人でかくの寂しい・・・」

と、教師に言いにくた。さっきの訴えと矛盾していることに、えっと思いながら

教師 「お友達ほとんど絵をかいちゃたし、もうそろそろ、弁当の時間なんだけど、S児ちゃんどうする？」

と聞くと

S児 「おなか空いたから、お弁当食べてからかく」

といった。あれだけ泣き続けたらお腹もすくだろうと思い、また、自分でかくといったので、その思いを受け入れることにした。

すると、S児はすぐに泣きやみ、クラスで一番に弁当を食べ終えた。そして、みんなと「ごちそうさま」をするときまでにさっさと絵をかき上げ教師のところにもってきた。

その後は何事もなかったように絵本を読み始めた。

○S児の学び

- ・ みんなと一緒にかくにはいやだなあ。
- ・ 理由、うまくいえないなあ。
- ・ 理由いったら聞いてくれるかなあ。
- ・ もうお弁当になるんだ、かかなかったなあ、どうしよう。
- ・ お弁当食べてからかこう。

○教師の学び

- ・ みんなと一緒にかきたくない理由は何なのだろう。
- ・ S児の思いに十分寄り添えていない。
- ・ 気持ちを探るよりも、共感していくことの方がよかったのではないか。
- ・ 泣くことでしっかり自分をアピールしている。意志の強さはある。
- ・ 教師の視線をしっかり意識している。
- ・ 自分で決めたことはしっかり行った。
- ・ 弁当の自信がS児の気持ちの切り替えに一役買っている。

○今後に向けて

教師は気持ちや思いを探ることをしているが、S児の気持ちに十分寄り添えていない。もう少しじっくり側にいるだけでも、随分違うのではないかと感じたので、今後はそういったかわりもしていきたい。

また、S児は周りの状況をわかっているかもしれないが、それよりも自分の思いを優先している。ある意味意志の強さをもっているので、今後はS児自身の中で状況に対して折り合いをつけられるようなかわりが必要だと考えている。

加えて、周りの幼児らのS児に対するかわりが、これから課題になると思われる。

人形（宇宙飛行士）をつくる活動のときのことである。

S児 「みんなと一緒な場所で作りたい」

先日もそういった訴えをしてきていたので、S児の中に何か理由があるのだろうと思いながら聞いてみた。

教師 「どこならいいの？」

S児 「製作コーナーの机の上」

教師 「どうして？」

S児 「(カーペットの上だと) つくる場所が狭くなるから」

そこで、あかグループのところにいき、カーペットを四等分した大きさを手で示し、

教師 「これだけがS児ちゃんのつくる（広さの）場所だよ。この大きさは1年生のお兄ちゃん達が勉強するときの机と同じくらいの大きさだよ」

と伝えた。S児は今ひとつ納得いかないようだったが、材料を配り、まずは実際にやらせてみて、「どう？狭い？」と確認した。すると

S児 「大丈夫」

と返事が返ってきた。何度か確認したが、いずれも「大丈夫」という返事が返ってきて、その声も大きくなっていった。

そして、最後まであかグループのカーペットで人形をつくりあげ、教師に見せにきた。

S児 「先生、できました！」

教師 「おっ、素敵なのできたね。S児宇宙飛行士のできあがりだね」

S児は、できた人形を嬉しそうに眺めたり、動かしたりしていた。

○S児の学び

- ・みんなと一緒だと嫌だなあ、落ち着かないなあ。
- ・うまく人形つくれるかなあ。
- ・先生が私のために場所をつくってくれたから、ここでつくってみようかな。

- ・本当にできるかどうかわかんないけどやってみよう。
- ・やってみたら、大丈夫だった。

○教師の学び

- ・S児の思いはどこにあるのだろう。まだ十分に捉え切れていないかもしれない
- ・具体的に使える場所を伝えたら、見通しをもてるのではないか。
- ・少し嫌そうな雰囲気を感じてもやらせてその後をしっかり見届け、かかわることは大切だ。

事例8 「うえ～んえんえん」

6月24日（金）

登園時のことである。

S児 「うえ～んえんえんえん・・・」

保育室の入り口ドアに背をもたらせ、右手にハンカチをもって涙を拭きながらS児が泣いていた。教師は、いつもは廊下で泣いているが、今日は教師が見えるところまできたかと思いつながら、こちらから声をかけることはしなかった。そして、S児の方から教師に話しかけてくれればいいなあと思いつながら様子を見守ることにした。

ほし組の幼児らがS児の前を通過してどんどん登園してくる。その間もずっとS児は教師の方を見ながらドアのところですすり泣き続けていた。教師が登園してきた幼児と話をしていると、まるで私の方を見てというかのように、泣き声のトーンが大きくなり、教師が見ると、また少し泣き声がおさまるといったことが続いた。

F児 「先生、9時になったよ。朝の集い始めよう」

教師 「そうだね。はじめようか」

その声を聞いてS児の声のトーンがまた一段と大きくなった。

教師 「S児ちゃん、朝のつどいは始めるから、こっちにおいで」

S児の手を引こうとすると、ここから動かないとでもいうように足を踏ん張った。少し強引に手を引っ張り、ピアノ横の椅子に座らせたが、泣き続けていた。声のトーンも大きい。朝のつどいが始まった。歌声にS児の声がかき消された。歌が終わった段階でS児は泣きやんでいった。そして椅子に座り帽子と鞆を身につけたまま朝のつどいに参加した。（朝のつどい進行中）

教師 「それでは今日の当番さん前に出てきてください」

S児 「今日の当番は黄色グループだよ！」

その声は大きく、みんなによく聞こえた。表情を見ると涙がいつの間にか消え、笑顔さえ見えた。朝のつどいが終わると、S児はさっさと登園準備をすませ、まるで何事もなかったかのように「さいばい隊いってきまーす」と元気に園庭に飛び出していった。

○S児の学び

- ・（先生が）私に声をかけてくれないかなあ。
- ・何も用意していないのに朝のつどい始まっちゃった。
- ・この場所（ピアノ横の椅子）でも朝のつどいに参加できるんだ。

○教師の学び

- ・泣くことでしっかり自分をアピールしているなあ。
- ・S児にとって泣くことは、自分の意志を伝える一つ的手段であろう。同時に指しゃぶりなどと同じような、自分を安定させる効果もありそうである。
- ・見通しや自信を持って参加できる朝のつどいだから、気持ちの切り替えができたのではないか。

○今後に向けて

登園時に泣いてしまい、なかなか保育室に入ってこれないのは、S児の中に何か不安があるからであろう。一日のスケジュールがはっきりわからないことや、今日一日何があるのかわくわくよりもどきどき不安が立ってしまうのかもしれない。そうだとするならば、前日のうちに翌日の予定を大まかに知らせたり、明日も楽しそうだとするような雰囲気伝えていくことが大切だと考える。

エピソード「大丈夫ですかねえ」

6月29日（水）

S児のお母さんから「大丈夫ですかねえ」と相談があった。そこで、一学期の間は登園時に不安定な姿をみせることが続くかもしれないが、本人は気持ちの切り替えができさえすれば大丈夫なので、お母さんが心配ならば登園後しばらく様子を見守ってもらうことを伝えた。

S児にとってもお母さんがしばらく玄関先にいることは気持ちの切り替えにつながったようで、7月にはいると、朝のつどい前に自分で身支度をすませる姿がうんと増えた。

事例9「おはようございます！」

7月5日（火）

登園時のことである。次々と登園してくるほし組幼児らと朝の挨拶を交わしているとS児がドアの所からゆっくりと教師の顔を見ながら入ってきた。今日は泣いていない。少しはにかんだような照れたような表情が見て取れる。

教師 「おはようございます。S児ちゃん」

S児 「おはようございます！」

元気な声が帰ってきた。

D児 「今日は泣いてないね、S児ちゃん」

教師 「ほんとだね」

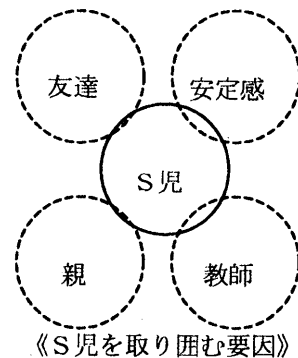
教師がそういいながらS児の頭をなでると、にこっと笑った。そして、連絡帳を手渡すと、うがいをするせ、体操服に着替え始めた。玄関先ではお母さんがにこにこしながら様子をうかがっていたが、やがて大丈夫だと判断したのだろう、帰っていった。

○S児の学び

- ・お母さんがいてくれるから安心だ。
- ・泣かないで朝のつどいまでに準備ができそうだと。
- ・先生に頭なでてもらって嬉しいな。

○教師の学び

- ・気持ちの切り替えにはお母さんの協力を仰いでよかった。
- ・触れながら認める方法は、有効だ。
- ・できたことは自信になっていく。
- ・友だちのこえかけは励ましになる。



○今後に向けて

気質的にとてもカンの強い面をもっている（お母さんもそう感じると言っていた）S児にとって、状況の変化がある場面では私達の想像以上に気になったり不安になったりすることがあるのだろう。それが登園の時の姿として現れていたように思う。事例8から、前日に見通しを持たせるような援助を心がけてきたが、それに加えお母さんの協力を得られたのが大きかったように思う。S児にとって不安なときに大人が私のことをちゃんとみていてくれるということが大切だったようだ。

今後は、泣くという方法でしっかりと自分をアピールできるS児の強さを意識しながらも、不安や弱さを抱えられる体制をとったり、自信や見通しをもてるような援助をしたりしていきたい。

事例10 「さわったらだめ・・・」

7月19日（火）

この日、S児は家からミヤマクワガタを持ってきた。男の子達は興味津々に虫かごをのぞき込んでいる。D児やG児、J児らの目はきらきらしている。朝のつどいにS児は「みるだけならいいけど、さわらないでください」とみんなに伝えていた。ところが、J児がふたを開け、さわってしまった。

S児 「うえーん、えっえっ・・・」

その様子を見てS児は泣き始めた。

J児 「ちがうよ。さわったんじゃないくて、ひっくりかえってたからなおそうとしたんだよ・・・」

J児はばつが悪そうである。

S児 「えっえっえっ・・・」

その泣き声を聞いて、近くにいたK児とG児、L児がやってきた。

K児 「どうしたの？」

G児 「J児ちゃん、なんかしたんか？」

S児 「・・・」(しくしく泣き続けている)

G児 「おまえ、さわったんか？」

J児 「・・・」

G児 「さわらないでっていっとながいがいや」

J児 「さわったんじゃないくて、ひっくりかえってたからなおそうとしたんだ」

L児 「それだって、さわったことになるぞ」

J児 「・・・でも・・・」

G児 「そうや、さわったことになるぞ。なおすときもさわるがいや」

このやりとりをそばで見ていたM児とN児もその場に加わった。やがてK児がJ児のあたまをぽんとたたいた。それを見たG児とL児もJ児の頭をぽんとたたいた。M児とN児も同じようにぽんぽんたたき出した。

教師 「ちょっとやりすぎじゃない？」

その言葉を聞いて五人は手を止めた。そのすきにJ児はその場からさっと離れ、テラスの方についてしまった。

S児 「さわったらげんこつという約束したのにさわったから叩いたの」

S児はきつとした顔つきで教師に言った。

○S児の学び

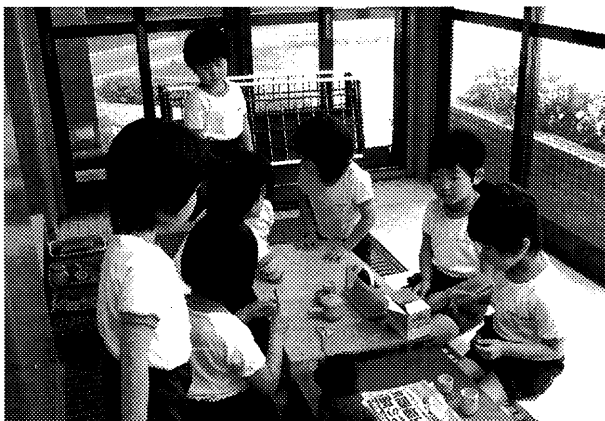
- ・ J児はさわらないでといったのにさわる人なんだ。
- ・ K児たちは私の方を見てくれた。

○教師の学び

- ・ S児は気の合う友だちに対しては有無をいわせないくらい自分のペースを貫こうとするが、ここではJ児に対して言葉で思いを伝えていない。
- ・ 自分と違う思いや考えをもつ他者をS児がどう受け止め、反応していくかこれからの課題であろう。

○今後に向けて

友達とのかかわりという面において、S児は気の合う友だちと一緒に活動しているときには少しおせっかいだと感じるほどに自分の思いや考えを伝え、周りの友だちの思いもそこそに自分のペースで行動しようとする。それがこの事例では、嫌なことに会い、自分の思いを十分に伝えられないでいる。普段あまりかかわることのない友だちから嫌なことをされたことで、教師にとってはこれまでしっかり見えていなかったS児の姿が新たに発見された。この背景にはS児なりの不安があるのだろうが、ここを乗り越え自分できちんと友だちと向き合って思いを伝えられるように、教師が寄り添ったり、代弁したり、思いの橋渡しをしたりしていくことが必要だと思われる。



～S児の事例を通して見えてきたこと～

○不安から安心へ～自己内トラブルの解消～

弁当に関する三つの事例（p 70～p 73）からは、弁当を食べなければいけないという呪縛から解放され、自信をもって弁当を食するまでの軌跡が見える。

始め、S児は時間内に全部食べられないかもしれないという不安、そして、時間内に全部食べられない姿を友達に見られたくないというプライドを自己の内に抱え、どうしようもなく、泣くという行為で表している。この時、

- ・時間という枠
- ・空間（保育室）という枠
- ・量という枠
- ・味覚（好き嫌い）という枠

がS児を自己内トラブルに誘っていると考ええる。これらの枠が教師の働きかけによって、S児にとっては乗り越えなくてはいけないハードルではなくなっていったことが、大きなポイントだろう。この時教師が施した手だては、

- ・場を変えるということ（保育室からプレールームへ）
- ・具体的で細かなステップを伝えたこと（「大きな口を開けて、そうそう」）
- ・イメージを容易に持たせるために擬音語を用いたこと（「パクッと！」）
- ・状況に応じながら、実際に多少強引でもやらせたこと（表情を捉えながら）
- ・できたことを大いに認めたこと（「やればできるじゃない！」）

である。全部食べることができたという経験をさせたことが、S児の自己内トラブルを解消させたのである。そしてそこにあるのは

自信と見通し

なのである。「食べなければいけない・・・」から、「食べられた」（事実・結果）→「食べられそう」（見通し）→「食べてみよう」（挑戦）→「食べられる！」（自信）へ。S児はこのことをからだを通して感じることはできたのではないだろうか。成功経験を得させることの大切さが見えてくる。

製作に関する二つの事例（p 74～p 77）からも、同様なことが言える。みんなと一緒につくれないかもしれないという不安、つくれないところを見られたくないというプライドが、S児の製作活動への参加を躊躇させている。ここでは、前述の枠のうち、時間及び空間の枠が自己内トラブルを引き起こす要因となっていると考ええる。この時の教師の手だても前述とほぼ同じである。そうすることによってS児に、つくることができたという経験をさせることができ、自己内トラブル解消のポイントである自信と見通しをもたせることができたと思われる。

付け加えておくと、このようにS児が自信と見通しをもてたのは、S児の育ちが上記のような援助に対応できるぐらいの時期にきていたということ、及びS児と教師との関係性が適当なものであったことがある。例えば3歳児にS児にしたような援助を行っても、S児のように

いかなだろう。肝心なのは教師がその状況をどう読みとり、援助していくかなのである。

ところで、製作に関する二つの事例からは、反省もある。一つには、S児の思いを十分に汲み取っていたかということである。わがままと決めつけてしまった感は否めない。もっと柔軟な対応が求められる。二つには、みんな一緒にという形にこだわっていなかったかということである。ねらいはどこにあったのか。そのあたりをもっと吟味する必要がある。今後さらに意識していきたい。

○今後の課題～受容と共感をベースに～

母親も認めるように、気質的にカンの強い面をもっているS児。これまでの生活ぶりから、新しいことに取り組むときに不安を覚え、躊躇し、自己内トラブルに陥ってしまうことの多いS児。このようなS児に対して自信と見通しをもたせるようなかかわりをまずは意識し実行していきたい。

加えて、事例10(p79)から示唆が得られたように、S児にはいろいろな他者とのかかわりの中で価値観の違いや、場の雰囲気を体で感じて欲しいと願う。そのために教師は、それらが感じられるような状況を意図的に仕組んでいくことも必要であろう。S児に対しては、園生活全ての場を利用して受容と共感をベースにかかわっていきたい。

さらに、S児と園生活を共にする友だちとの間に、なんでもいい合え、弱さをさらけ出せる空間及び関係性ができるようにかかわっていきたい。この時、S児と園生活を共にする友だちに対して、教師がとる手だてのベースも受容と共感だと考えている。

そうすることで、S児も、S児と生活を共にする友だちも、からだを通して他者を感じ、さまざまなことを学べると思うのである。